

	INF	REF	こども	電話	メール	中央計	行徳	BM	南行	信篤	平田	駅南	全館計
9月	851	453	899	37	3	2,243	1,417	46	246	172	91	578	4,793
累計	3,860	1,998	3,447	608	28	9,941	6,402	185	1,378	909	535	3,643	22,993

INF:インフォメーション・カウンタ REF:レファレンス・カウンタ BM:自動車図書館

📄 今月のレファレンス記録票から

分類

質問と内容

413.3 微分・積分の「ネイピア数 e」について、分かりやすく説明されている資料が読みたい。

『数学の世界 数の神秘編』（ニュートンプレス 2018）p.113 に、「ネイピア数 e は、 $(1+1/n)^n$ の n を無限に大きくしたときの数です。ネイピア数の「ネイピア」は、「対数」を考案して発表した、イギリスの数学者のジョン・ネイピア（1550～1617）に由来します。対数とは a を何乗したら x になるかに相当する数で、「 $\log_a x$ 」とあらわします。ネイピア数の記号「e」はオイラーが 1727 年に使いはじめました。a に e を使う対数は、「自然対数」といいます。自然対数の関数「 $y=\log_e x$ 」は、微分すると「 $y=1/x$ 」と簡単な形になる性質があります。一方、e を使った指数関数「 $y=e^x$ 」は、微分しても $y=e^x$ のまま変化しない性質があります。」との説明がある。

『対数のきほん 複雑な計算をかたんにできる!』（ニュートンプレス 2017）p.56「特別な数「ネイピア数 e」とは?」の章には、「e は、2.718281...と、小数点以下が無限につづく数です。スイスの数学者のヤコブ・ベルヌーイ（1654～1705）が 1683 年に、「 $(1+1/n)^n$ 」という式を使って発見したといわれています。」とあり、ネイピア数 e の成り立ちや性質が分かりやすく記載されている。

779.1 東海道にある 53 の宿場、もしくは東海道沿いを舞台にした落語の演目を知りたい。

『古典・新作落語事典』（瀧口雅仁／著 丸善出版 2016）p.350 の「場所、舞台索引」をみると、東海道の宿場では「藤沢宿」で 2 題、「鞠子（丸子）宿」「金谷宿」でそれぞれ 1 題が挙げられている。また、宿場との記載はないが東海道の地名として「日本橋」「品川」「小田原」「箱根」などの項目もある。中でも「品川」に関連する演題は多く、「居残り佐平次」「匙加減」「四宿の屁」「品川心中」「品川の豆」「將軍の賽」「ちきり伊勢屋」の 7 題となっている。

『落語と歩く』（田中敦／著 岩波書店 2017）巻末の「都道府県別落語地名」では、「日本橋」「品川」「神奈川」「川崎」「藤沢」「大井川」「掛川」「原」「三島」「岡崎」「七里の渡し」「大津」の東海道沿いの地名が掲げられており、その地を舞台とした演題が挙げられている。

他にも、『東海道落語の旅』（保田武宏／著 こずえ 1976 千葉県立西部図書館所蔵）には、「日本橋」「芝」「品川」「鈴ヶ森」から「膳所」「大津」「逢坂山」「京都」まで、27 の街道沿いの要衝地ごとにその地に関する落語が 1 ケ所につき 1～4 話、演題と簡単な解説に加え落語の断自体も記載されている。


791.2 千利休が詠んだ歌が見たい。

『千利休のすべて』（米原正義／編 新人物往来社 1995）の利休の和歌「第一節 利休歌の概要」（諏訪勝則／著）に、利休が差し出した書簡などに見られる歌 45 首が表（1）（p.216-219）として記載されている。併せて、書簡の歌に較べると信憑性に欠けるものの利休の作と言われる歌として、茶書などに記録されている歌 38 首が、表（3）（p.223-225）にまとめられている。

同書では、利休が百首の和歌に託して茶湯の教えを示したとされる「利休百首」についても

触れており、p.226には「利休百首」および表(3)に見られる歌は、利休に仮託したものとすべきであろう。(中略)茶の湯が「茶道」として確立される段階において、「茶道」の教導者などが茶の湯の大成者利休の名を利用して、道歌を作したと考えられる。」との記載がある。

なお、「利休百首」は『利休百首』(井口海仙/著 綾村坦園/書 淡交社 1988)で見ることができる。同書の著者による前書きでは、「全部が利休の作であるとは、断言できない。」とある。

 **G I V E U P !** ご存知の方はご教授下さい。

Z/ナ 『荷風全集 第23巻 初版』(岩波書店 1963) p.174の「断腸亭日乗」昭和16年「六月初六」に「葛粉一袋 越後小谷町産 金参円なり」とあるが、「小谷町」という町名が存在しないことから、「小千谷町」の誤植ではないか。

該当資料、同全集再刊(2刷)23巻(1972) p.174、新版24巻(1994) p.523、第二次刊行(2刷)24巻(2011) p.523でも「越後小谷町産」との記載。なお、新版(第二次刊行)21巻(2010)の後記には、「原本『断腸亭日乗』を翻刻、収録することとした。原本『断腸亭日乗』は、永井永光氏によって保管されており、(中略)これらは、岩波全集発行第一次『荷風全集』(中略)においてはじめて翻刻、紹介された(第一刷、第二刷)。本全集では、その方針を踏襲しながら改めて原本と照合して本文を定めたうえ、原本公開以前の中央公論社版『荷風全集』所収の日記篇、東都書房版『永井荷風日記』所収本文との「異同」を示すなどの配慮をした。」とある。原文公開以前の公刊本『荷風全集 第22巻』(中央公論社 1952) p.140及び『永井荷風日記 第6巻』(東都書房 1959) p.38、も確認したが、いずれも「越後小谷町産」。『断腸亭日乗 第5巻 新版』(岩波書店 2002) p.185でも同記載。

葛粉については、『永井荷風ひとり暮らしの贅沢』(永井永光/[ほか]著 新潮社 2006) p.43「茶筒に残る葛粉」で、『断腸亭日乗』の昭和9年10月1日、昭和15年5月23日、昭和16年4月11日、昭和17年11月16日に葛粉の記載があることがわかるが、本文で産地については記されていない。

改めて、葛粉記載の該当箇所を確認すると、「金兵衛のかみさん余がために新潟よりつてをたよりて購ひ求めしなりと云ふ。」とある。また、『荷風と戦争 断腸亭日乗に残された戦時下の東京』(百足光生/著 国書刊行会 2020) p.109-110でも「葛粉一袋(越後小谷町産)」との記載があり、「金兵衛」の説明もあるが、おかみの名前や出身地等の記載はない。

以上、小谷町が小千谷町の誤植、誤記であるという資料は確認できなかった。『荷風全集』の後記より、誤植とは考えにくく、可能性としては荷風の誤記ではないかと推測される。なお、新潟県に小谷という地名はある。(村上市小谷、十日町市松之山小谷)

他にもこんな質問ありました(クイック・レファレンスから)

分類

質問

⇒ 回答、補足事項、蘊蓄など

Z/ナ 永井荷風の小説で隅田川界隈を舞台にした作品にはどのようなものがあるか⇒『隅田川の文学』(久保田淳/著 岩波書店 1996)では、中世以前から近代までの隅田川を舞台とする文学作品が取り上げられている。同書第2章の「変貌する母性の川—近代(二) 永井荷風 風景と文明」に、明治42年(1909)12月に発表された「すみだ川」のほか、隅田川が点景として描かれている「冷笑」、隅田川が女主人公の運命を押し流す非常な存在として捉えられている「夢の女」が紹介されている。

289.1 日経新聞のコラム「私の履歴書」で2020年8月に連載されていた記事が読みたい⇒データベース「日経テレコン」で8月の同連載を検索し、1日から31日までの全30回、第8代ユネスコ事務局長・松浦晃一郎氏の記事の掲載を確認した。データベースで記事全文の閲覧可能。

674.3 須和田公園の桜について書かれた資料を探している⇒『桜の見どころ発見MAP』(市川市観光交流推進課 2017)に須和田公園が紹介されている。写真と共に「弥生時代の住居跡、須和田遺跡の傍らで桜を堪能できる。ベンチも多数あり。(ソメイヨシノ約80本)」との記載あり。

791.6 床の間の作り方が知りたい⇒『床の間を知る 茶席にみる床かざりの基本』(淡交社 2012) p.30に床の間の建築様式、p.92に床の用材として用いられる主な木材について記載あり。『床の間』(建築資料研究社 1998) p.54-56には、床の間と床脇(脇床)の詳細が図面と共に掲載されている。